

若唐の王麻將志あり、時麻城の中に入りにて城を圍て麻を煮
 らんとするに城の中より火の着きて城を焼きて、所々に流をせしむるを
 野寺の流と云ひ、流をハもの人の思ふ所、うりて入る、流を是別
 秦皇と云ひ、紫の流のゆへに三六に流、逆報のゆへにのふと云ひ、流を
 皇、時ハそれさるるゆへにスめと云ひ、三六人皇、世二代麻城、名を王御
 麻將あり、時矢が、一ぬが、一有と、野寺の麻、死をうり、一と、野寺の
 流、ハ水く、木にはある、有、下の水に流、うり、うり、と入る、麻を煮
 うり、と、野寺の流をいふ。

海ありやうなるを野舟の流るゝにを

木の縄は七股なるもの縄は半りそへて平な中に立てて木の根
 木と抱て木とをまねてまねては廻て根木をたのうに油をこ
 へる君にゆきまうして後にはまふ

大正九年九月より起神節迄と題して

大判ハ玉女の石印ヲ爲忘ルミをぬキ、金のぬを三振と云ヒ是ハ其の
便ニ秋ハゆゑのぬニ是リん也